

是は手筈を革にて作りしなるべし、今革文庫、或は革文箱などの類ひならん、されども中に檀紙を入たるなどを思へば、料紙筈にやあらん。

〔貞丈雜記<sup>調度</sup>〕一手箱はすみあかの形のごとくせい高し、かけごあり、角々を丸みを付て、ふたの上もかうもり高也、梨子地蒔繪などする也、寸法等は婚入道具記にあり、古常に手まわりの物を、何にても入て置く箱也、入物定なし、此物も今はすたれて、常に用る人なく、婚禮の時のかざり物にのみする也、手箱を革にて作りし事もあり、

〔嫁入記〕一手ばこの内に、小ばこ四つあり、その内に入物、一にはおしろい、一にはたうのつち、一にはまゆすみ、一にはわけめのいとなどのやうのおけはひぐそくのたぐひなり、たゞしにつきなごに何の入とさだまりていふ事にはあらず、手ばこ大小に入物さだまらず、

一手箱のかけごの事、これも四つのものかすのうち、ほんのてばこのごとく、けはひのぐそくを入、ふくろにこめて、おこしなどの内にも御もたせられべし、かりそめの所にもようゐ有べし、<sup>略</sup>

一手箱のをは、くみなり、

〔古事談<sup>王道后宮</sup>〕一條院崩御之後、御手習ノ反古ドモノ、御手筈ニ入テアリケルヲ、入道殿御覽シケル中ニ、藁蘭欲茂、秋風吹破、王事欲章、讒臣亂國トアンバシタリケル<sup>本</sup>、吾事ヲ思食テ令書給タリケリトテ、令破給ケリ、

〔和泉式部集<sup>續集</sup>〕懸子なき手箱もたる人の、懸子のかざりみにあるを見てこへば、とらせたるをあはずとて、かへし、にいひやる、

くやしくもみせてけるかなうらしまのこめて置たる箱の懸子を

〔明月記〕寛喜二年正月十五日戊寅、後聞、行幸被儲置物、以錦造厨子、以紫染物造手箱二合<sup>各笠六置</sup>